

# 『浄慈院日別雑記』にみるくらしと食（その3）

杉浦博子、稲吉真子

## Life and Food in “Jojin Hibetu Zakki” (Part3)

Hiroko Sugiura, Mako Inayoshi

キーワード: 東三河地方 East Mikawa area, 食文化 food culture, 江戸時代 Edo era  
和菓子 Wagasi, 贈答 an exchange of gifts

### 1. はじめに

筆者らは、近世の地域の食生活文化の特徴をとらえるため、庄屋文書などを取り上げ、検討してきた。本稿では、寺院のくらしと食の関わりについて、第一報<sup>1)</sup>、二報<sup>2)</sup>に続き、同じく雑記類より贈答品などをおし、1844年～1854年代（弘化年間～嘉永年間）の東三河地方の農村部の食生活文化の特徴の一端を明らかにしたい。

### 2. 方法

第一報、第二報と同様に、『豊橋市浄慈院日別雑記』<sup>3)</sup>『豊橋市浄慈院日別雑記Ⅱ』<sup>4)</sup>より1844年～1854年の「浄慈院日別雑記」を中心に検討する。

なお1847年は、3月から6月まで、1849年・1853年は、1月から7月までの日記である。1854年については、虫食いや破損で判読不能の文字が多く、内容が読み取れない部分が多くあり、史料としては十分とはいえない。

### 3. 結果及び考察

#### (1) くらしと食生活

##### 1) 1845年（弘化2）

1月4日は、子供へ節振舞の日であり、この年は汁粉・酢和への献立内容で、振舞われた筆子

の数は31人である。<sup>5)</sup> 1月に入ると、表1に示すように味噌作りが始まる。

表1 味噌の仕込

年	工程（月・日）			備考
	洗・漬	煮ル・搗丸メ・吊ス	仕込	
1845	1・5	1・6	2・22	味噌豆四斗、塩壹斗四升
1849		1・24	2・21	味噌豆四斗口
1851	1・19	1・20	4・14	味噌玉五斗、塩壹斗七升、置塩貳升
1853	1・27	1・28, 29	4・23	味噌豆四斗
1854	1・21	1・22	4・2	味噌豆四斗五升余（豆四斗一桶）

1845年は、5日に味噌豆四斗を水に漬け、6日は朝から煮始めたが、半分はムラ煮となり、「半分過取除五臼計搗丸目メ、跡又桶ニ入、釜にて夜中煮る」<sup>6)</sup>こととなった。2月22日に搗き丸め吊るしておいた、「みそ玉こなし、新酒桶貳ツへ貳斗ツゝニ仕込、朝よりあこ塩壹斗四升求七升ツゝ別而入、三合五勺塩也、水凡八分め程ツゝ入仕込也」<sup>7)</sup>斗あるが、1920年ごろは豆一升到塩三合の三合塩<sup>8)</sup>が一般のようで、それと比べても塩辛い味噌であることがわかる。塩辛い味噌に、「醤油ノ実七分め程、去年ノ赤みそかけん悪ク塩からき故、まぜ合せる」<sup>9)</sup>とあるが、塩

辛さを和らげるのに醤油の実を用いているのは、興味深い。

6月には、清源寺から祭礼の甘酒が届く。<sup>10)</sup> 清源寺からの甘酒の記録は、1844年・1849年・1851年・1853年・1854年にもみられ、恒例化していることがわかる。

## 2) 1847年～1851年

1847年は、信州善光寺付近で大地震があり、羽田村からの参詣者の中にも犠牲者が出ており、院主も「氣之毒千万也」<sup>11)</sup>と嘆いている。また、五月の節句をはさみ、4月中旬から5月下旬にかけて多くの柏餅の到来がみられる。

1849年は、苗代に籾を播く4月には、焼米の到来が多くみられるようになるが、<sup>12)</sup>この焼米については、苗代に種子籾を播いた残りなどで作り、その種籾を焙烙などで炒って籾を取り、食用にするようである。<sup>13)</sup>浄慈院のある羽田村(現在の豊橋市花田町)の南西方向に位置する牟呂町での、昭和十年代半ばの調査記録によれば、残しておいた籾種を臼ではたき、食用にしていた。<sup>14)</sup>

浄慈院には、楊梅(ヤマモモ)の木もあったようで、5月から筆子も手伝い実を取り、方々に贈っている。<sup>15)</sup> (写真1) (写真2)



写真1 楊梅 (2011・6)



写真2 楊梅 (2011・7)

また、5月中旬頃には、小麦を干上げている。1849年には、壺石四升の収穫があり、6月に入り餛飩を打ち振舞っているが、その前日には、たまりや薬味の胡椒を買い求め準備している。<sup>16)</sup>

1851年は、10月に亥の子餅がみられるようになる。亥の子餅は牡丹餅であり、筆子からも届けられている。しかし、牡丹餅に代わり粳米の粉を搗いた飯団餅がみられるようになる。翌月の11月には、さらにその頻度を増す。<sup>17)</sup>これも当時の逼迫した経済状況と、関わりがあるのであろうか。11月には、頼母子講や仏名会用の白味噌を仕込んでいる。<sup>18)</sup>

## 3) 1853年～1854年

3月に入ると桃の節句をひかえ、餅(節句餅)の到来が多くなる。1853年は、餅の記録以上に油揚げの到来が多く、3月1日だけでも91枚にもなる。<sup>19)</sup>大量の油揚げとの関係は、明確には出ない。

1854年の日記は、虫食いなどにより不判読の部分が多く十分に内容を読み取れないが、6月に入り頻繁に地震の発生がみられ、<sup>20)</sup>11月4日には「今朝五ツ半時大地震」<sup>21)</sup>寺院の本堂や玄関、台所などの壁が落ちるなど、被害が出ている。

## (2) 見舞の品物

### 1) 病氣見舞

雑記類には、病氣をはじめ何らかの見舞いに、品物の遣り取りがされている。病氣の見舞いには、食品類が用いられており、表2に示すとおりである。1845年1月に「夜前四ツ頃より院主癩氣差起、」<sup>22)</sup>見舞い客も多く訪ねて来ている。見舞いに届けられた品は、白砂糖が多く、ほかには、飴・菓子・長芋・餛飩などである。見舞いの主は、社会的に地位の高いと思われる人々であり、当時としては高価な白砂糖が用いられているが、院主に対する配慮であろうか。

また、浄慈院から贈った見舞いの品は、餛飩や豆腐もみられるが、多くは、買い求めた菓子類である。菓子包の中身の記録はないが、病にあるからこそ口に出来る嗜好品であり、希少価値ある品であることがわかる。

表2 病氣見舞（その1）

年月日	入ル/遣ス	内容	備考
1844・2・17	遣ス	上菓子 二袋	
6・10	遣ス	うとん 一重	
11・19	遣ス	みかん（五十）、九年（廿）、 上菓子（二袋）、天文丸、 生か漬（百五十文）	（きくや）上菓子
1845・1・11	入ル	白砂糖 曲物一	1・10（院主）瘧
12	入ル	汁あめ 一曲	
14	入ル	白砂糖 壺袋	
15	入ル	たん切	
	入ル	菓子 少々	
	入ル	長芋 七本	
	入ル	温饨粉 貳袋	
16	入ル	白砂糖 一曲	
	入ル	温饨 壺重	
	入ル	白砂糖 壺曲	
4・17	遣ス	氷砂糖 貳百文	
5・6	遣ス	金平糖	夫婦不快
8	遣ス	うとん 百文	「忠吉」へはがき持取
21	遣ス	菓子 少々	
晦日	遣ス	菓子	淋疫
6・6	遣ス	うとん 百文	「忠吉」へ求二行
11・24	遣ス	千才草 一袋	白ミソ（一重）受来ル
1849・2・9	遣ス	米（壺升）餅（少々）	二三日せつくり不食、4・29 病氣全快礼 まん中一袋入
4・1	遣ス	白砂糖 壺曲	
3	遣ス	牡丹餅 少々	4・26 少々ツゝ宜敷ト申
28	遣ス	切素麵 十一わ	
閏4・26	遣ス	袖香糖 一袋	
5・16	入ル	豆腐 二丁	宗賢ノ見舞
6・20	遣ス	瓜（一）、真（一）	
25	遣ス	菓子 一包	リ病
1851 3・1	遣ス	菓子 一包	
20	遣ス	菓子 一包	
4・24	遣ス	切素麵 十一わ	大病
5・4	遣ス	柏餅	
15	遣ス	菓子 一包	

表2 病氣見舞（その2）

年月日	入ル/遣ス	内容	備考
1851・5・20	遣ス	白せんべい 少々	不食
23	遣ス	菓子 一包	
9・11	遣ス	菓子	
27	遣ス	白さとうふ 口文	眼病
	遣ス	菓子 一包	全快ニ付豆腐（弐丁）入、半し（一）遣ス
11・21	遣ス	菓子 一包	病氣
1853・3・11	遣ス	菓子 一包	三四日不快
6・12	遣ス	菓子 一包	不快
1854・2・10	遣ス	白砂糖（一袋）、角納豆	風邪
晦日	遣ス	菓子 一包	風邪
3・3	遣ス	菓子 一包	風邪
29	遣ス	かんざらし（百五十口口） 口砂糖 一曲	積(癩)痛 6・18全快祝 赤飯一重入
閏7・8	遣ス	供物	

## 2) 留守見舞

留守見舞いと称し、表3に示すように、菓子類の贈答が多くみられる。1845年には、政蔵夫婦が善光寺参りに出かけ、その留守を見舞うため、小僧の戒浄が壺文菓子を届けている。そして、政蔵からは、匙や草履などの土産が届いている。<sup>23)</sup>

1847年は、「院主夜前道中無滞四ツ頃帰院被致也」<sup>24)</sup>とある。1847年の日記は3月から6月までの記録のみであるため、浄慈院の院主が、何時・誰と何処へ出立したのか、読み取れないが、3月下旬から5月に見舞いとして、羊羹や饅頭、柚香糖など菓子類の到来がみられる。

## 3) 普請見舞

浄慈院では、普請の記録が多くみられ、特に1845年は、門などの普請をしている。その作業は、2月2日に下地の石屋から門柱と蹴放を運び、4日に「子共ハねイ河原へ小石荷ニ行」<sup>25)</sup>8日には地築棒を借りて来ている。そして、9日に「今日は吉日にて門地築初・・・」筆子・若者、合わせ十九人と舎力で、夜五ツ時頃迄かかり地築している。この日は、昼食から夜食迄四度の食事と酒も五升用意され、「風呂入四ツ過帰ル」<sup>26)</sup>と初日を終えている。

2月16日は表門柱を立て、棟上が行われている。20日には大工4人が来て、「棟札板削、慈明棟札認」と棟札書祝いをしている。小豆飯・とうふと菜の汁の食事が振舞われているが、<sup>27)</sup>この普請に際し、筆子たちにも祝いに、赤飯を一杯づつ振舞っている。<sup>28)</sup>

以上のように、浄慈院の普請に対して、表4に示すような見舞いの品が届けられている。金銭のほか、蕎麦や豆腐・油揚げ、牡丹餅などの食品もみられる。

特に牡丹餅などは、六七十と数も多い。仕事に来ている大工にも出され、肉体労働の仕事内容に見合う食糧であり、すぐ口に出来る簡便さや、普請をしている浄慈院に遣わすとともに、実際に現場での作業に携わる人々に対するのこころ配りでもあり、重宝な食べ物である。また、寺院の何処の普請をしたのか判明しないが、1853年には、おすミ殿から普請見舞として、牛蒡をすぐ食べられるように調理したものが一重届けられているが、同様なことがいえる。

表3 留守見舞

年月日	事柄	入ル/遣ス	品物	備考
1845・2・24	善光寺参	遣ス	杏文集子 五十文	政蔵夫婦 3・7 土産入ル
4・20	院主出立	入ル	饅頭 壹袋	4・17 祐福寺へ出立
		入ル	落 三わ	4・21 帰山
1847・3・26	慈婦国	入ル	油揚 十九	
29	院主留主	入ル	牡丹餅 壹重	
晦日	院主留主	入ル	羊羹菓書 壹枚	
4・3	善光寺参詣	遣ス	饅頭菓書 壹	
14	院主留主	入ル	油香糖 壹袋	清源寺入来
25	院主留主	入ル	まん中 壹袋	
5・1	院主留主	入ル	菓子菓書 一枚	
1851・9・29	和尚, 宗賢留主	入ル	菓子 一袋	8・23 早朝老和尚宗賢随伴二而楠葉大会御足出
1853・3・15	京其外見物	遣ス	菓子配書 (一), とふふ(二)	

表4 普請見舞

年月日	入ル/遣ス	品物	備考
1845・2・14	入ル	蕎麦 二重	2・9 門地築初
16	入ル	とうふ 二	2・16 棟上
	入ル	上ケ 九ツ	
	入ル	祝儀 (十疋)二軒, (廿疋)三軒	
17	入ル	銭	村方二三人
	入ル	牡丹餅 六七十	
18	入ル	牡丹餅 五十	
	入ル	蕎麦切 一重	
	入ル	焼ふ 百五十	
	入ル	祝儀 (廿疋)二軒	
19	遣ス	焼ふ 三十五	権右衛門へ
	入ル	祝儀 廿疋ツ	子共 四五人
	入ル	祝儀 廿疋	
22	入ル	祝儀 十疋	
4・1	遣ス	赤飯	(坂ツ寺)庫裏普請見舞
9・10	遣ス	上ケ 廿	
12	遣ス	とうふ 三	
1851・2・19	遣ス	あけ 十一	馬小屋建
晦日	遣ス	箱菓子(一), とふふ (二丁)	到来ノ箱菓子
3・15	遣ス	普請見舞二 十疋	五朗兵衛 4・8 普請見舞礼 落入ル
12・6	遣ス	普請見舞二 十疋	(新田) 権右衛門
1853・3・6	入ル	牛房料理 (一重), あけ (六ツ) 伊勢海鹿 (一袋)	おすミ (返) 半し(一)遣ス

表5 祝(悦)・挨拶の品

年月日	事柄	入ル/遣ス	品物	備考
1844・3・1	初	入ル	赤飯 一重, ふき	(半右衛門)女子
2	初節句	遣ス	千歳草 一袋	(半右衛門)女子へ
4・14	初節句	入ル	柏 十五入	久左衛門
10・28	慈明ノ悦	入ル	上ケ 十三	10・22 上方より帰院
11・8	慈明挨拶	入ル	まんちう 壺袋	和平
9	慈明へ	入ル	ゆこふ湯 一本	
12	慈明悦二	入ル	上ケ 十五	
	髪置	入ル	赤飯 一重	(平十)子共
13	髪置	遣ス	まん中 一重(廿四)	平十へ
15	髪置	入ル	赤飯 (一櫃), 煮染 (一重)	(助九朗)助十
	髪置	遣ス	まんちう (一袋), 半し (絵二枚)	祝儀 助九朗へ
1847・5・5	初節句	入ル	柏餅 一重	(半右衛門)息子
	初節句	遣ス	柚香糖 一袋	(半右衛門)息子へ
22	帰寺悦	入ル	千歳草 一箱	(院主)帰寺
	帰寺挨拶	入ル	温鮎 一ろし	(院主)帰寺
29	帰寺悦	入ル	菓子 一袋	(院主)帰寺
6・9	帰寺挨拶	入ル	素麺 五手	(院主)帰寺
1849・2・28	初節句	入ル	節句菱切餅 五重	才次郎
29	初節句	遣ス	菓子葉書 壺匁五分	(政蔵)娘
	初節句	入ル	節句餅	政蔵より
	初節句	入ル	節句餅	平十より
3・1	初節句	遣ス	菓子葉書 壺匁五分	(平十)娘
6・27	養子二行悦	遣ス	菓子配書 一	
1851・2・晦日	初節句	入ル	節句餅 七ツ	平十より
3・1	初節句	遣ス	まん中 一袋	(平十)娘へ
4・26	初節句	入ル	柏餅 一重	直次郎
28	初節句	遣ス	美濃 (十四まい), 扇たこ (壺ツ)	(羽根井)直次郎へ
5・26	縁付祝	遣ス	まん中配書 一	
	嫁貰祝	遣ス	菓子配書 一	
10・7	帰院悦	入ル	饅頭 一袋	(宗賢)上方より帰院
11	検見礼	遣ス	菓子 壺袋	半右衛門へ
1853・1・21	嫁入	遣ス	白味噌 (一重), 石盃 (一ツ)	到来ノ石盃 才次郎方へ
3・23	出産, 悦	遣ス	供物 (一包)	(助九朗)孫
6・20	病氣全快礼	入ル	口桑瓜 (七本)	供物一包 遣ス
1854・9・3	縁付祝	遣ス	菓子 (一箱), 柘榴(五ツ)	おみな
12・4	帯祝	入ル	餅大二重, 小二ツ	(才次郎)おかつ

表6 贈答と菓子

年月日	内容	入ル/求ル	備考	
1844・11・18	(きくや) 上菓子(貳袋)	貳百文	求ル	
1845・4・23	まん中	四百文	求ル	町へ、子共行
5・26	上菓子、有平糖	百文	求ル	子共行
8・17	(きくや) 上菓子		入ル	
12・10	(菊屋) 五ツ組		求ル	四人前残り戻
	(菊屋) 上菓子		求ル	供物用
1847・4・7	(菊屋) 千歳草小判		求ル	
5・24	上菓子	貳百文	求ル	菊や二而
25	(菊屋) 箱菓子		求ル	代貳百文、尤箱ハ此方より遣ス
	巻せん	四十貳文	求ル	
6・13		壹鉢	入ル	菊屋 暑気見舞
18	(菊や) 玉あられ	一箱	入ル	清源寺
1849・1・3	(菊屋) 袖香糖	一	入ル	菊屋年礼
6・4	(菊屋) 葛餅	十七	入ル	菊屋暑気見舞
7	(万屋) 五本羊羹配書ツ		入ル	龍雲寺、光明寺
1851・1・5	(菊屋) 白雪糕		入ル	菊屋年礼
5・4	袖の花		入ル	夜具貸ス礼
7・5	玉あられ		入ル	政蔵殿入来
22	油菓子		入ル	手紙認礼
11・23	(菊屋) 引菓子		求ル	頼母子講 引菓子 代金払
12・12	窓の月		入ル	半右衛門
20	(菊屋)	十四	入ル	菊屋寒中見舞
1853・1・28	(菊屋) 上菓子	壹貫文	求ル	
3・11	(万屋) まん中	百文	求ル	配書二而
1854・7・16	春の雪	一箱	入ル	応賀寺弟子

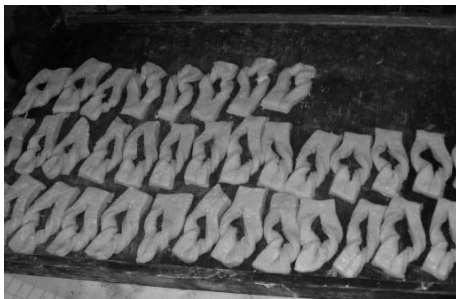


写真3 油菓子 (2007・2)



写真4 油菓子 (2007・2)

## (3) 祝い(悦び)・挨拶に用いられた品物

初節句や髪置などの祝い事には、表5に示すような品物の贈答がみられる。誕生した女子の初めての節句祝いには、赤飯や餅が届き、同様に五月の男子の節句には、柏餅である。また、髪を伸ばし始める髪置の祝いには、赤飯が届けられている。これら祝い事に対し、浄慈院からは、饅頭や柚香糖などの菓子のほか、菓子の商品券にあたる葉書や配書が贈られている。

このほかに、留守見舞いの項でも述べたが、この1847年には、院主は寺を空けている。5月頃に院主が寺に戻ると、その帰寺を祝い、饅頭や素麺、菓子などを持参し、訪ねて来ている。

嫁入りなどの祝い事にも、寺院からは、饅頭などの菓子類を贈っている。贈る相手先にもよるが、寺院という地域社会における立場とも関わりがあるのであろうか。

## (4) 贈答と菓子類

日記中には、菓子を求めた記録が多くみられる。すでに、1844年の菓子の購入状況については報告したが<sup>29)</sup>、「子共町へ行、上菓子・す・扇求」<sup>30)</sup>のように、具体的な菓子名や、菓子屋の名前が記されていない事が多い。ここでの町とは、隣接する吉田町のことである。

1844年以降の菓子屋の名前と、商われていた菓子名を表6に示した。たとえば1844年には、「夕方下男万屋へ二度まんちうかよふかん無哉尋遣候処、なき故きくやへ上菓子式袋式百文求ニ遣也」<sup>31)</sup>とある。二度も出向いたが手に入らず、仕方なく一袋百文の「きくや」の上菓子を二袋求め、病氣見舞いに用いている。饅頭や羊羹は、「万屋」の名物菓子であったのであろうか。

ところで、1802年当時の吉田町には、饅頭屋12軒、煎餅屋3軒、飴屋が5軒、菓子屋・受売が16軒みられるが、<sup>32)</sup>「きくや」や「万屋」は、名の知れた菓子屋であろう。

1851年5月には、六郎兵衛に蚊帳と蒲団を貸した礼に「柚の花ト云菓子一・・・」<sup>33)</sup>とある。「柚の花」は吉田の辺りでは、知名度のない菓子のようなのである。

そして7月には、「九平行の手紙認ム礼ニ油菓子入」<sup>34)</sup>とある。この油菓子は、小麦の粉を練って棒状にし捻じり、油で揚げた菓子であるが、

伊勢参りなどの旅日記<sup>35)</sup>にもみられ、岡崎などで買い求めている。庶民の口に出来る駄菓子であり、三河湾を臨む地域では、3月の雛祭りの菓子として、今日まで傳承されている菓子でもある。(写真3)(写真4)

年末には、頼母子講が催され食事も振舞われているが、その際、菊屋の菓子が引かれている。1845年は、「弥助使ニて菓子箱戻ス、遣、五ツ組四人前残り戻、百文添遣」<sup>36)</sup>残った4人分の菓子を、百文出して引き取ってもらっているが、その引菓子は五ツ盛りの箱入りであった。

「玉あられ」については、すでに報告<sup>37)</sup>したように、三河国吉田藩主も贈答に用いた菓子であり、吉田の名物菓子の一つであった。

## 4. おわりに

先報に続き、寺院の雑記類より1844年～1854年の農村部にある寺院の暮らしを中心に、東三河地方の食生活文化について検討した。浄慈院は、地主的農業経営を営んでいる寺でもあり、吉田藩の城下町、吉田に隣接する農村部に立地しながら、菓子類の贈答が多いことに注目したい。年礼や暑中見舞い、寒中見舞いなどの贈答品にもみられるように、特定の菓子屋との取引があることもわかった。

寺院では、饅頭や巻せん・上菓子などが、頻繁に買い求められている。1844年以前からもみられた「千歳草」「柚香糖」「白雪糕」のほかに、「柚の花」「窓の月」「春の雪」などといった、名前の付いた菓子がみられるようになっている。これらは、地域の菓子文化の発展の現れのひとつと考えるとよからうか。

日記には、毎日のように加持祈祷の記録がみられ、痲瘡の祈祷の記録も多い。それに伴う痲瘡見舞いや、神立て祝いには、食べ物もみられるが、それについては、次号で検討したい。

今後は、引き続き1850年代後半の雑記類より地域の食文化の特徴を明らかにしたい。



『浄慈院日別雑記』にみるくらしと食（その3）

引用文献

- 1) 杉浦博子 仲村香織『浄慈院日別雑記』にみるくらしと食(その1) 愛知学泉大学・短期大学紀要第44号, 33-40(2009)
- 2) 杉浦博子 稲吉真子『浄慈院日別雑記』にみるくらしと食(その2) 愛知学泉大学・短期大学紀要第45号, 25-32(2010)
- 3) 愛知大学総合郷土研究所編:愛知大学総合郷土研究所資料叢書第9集『豊橋市浄慈院日別雑記』あるむ 愛知 (2007)
- 4) 愛知大学総合郷土研究所編:愛知大学総合郷土研究所資料叢書第10集『豊橋市浄慈院日別雑記Ⅱ』あるむ 愛知 (2008)
- 5) 4) に同じ 61
- 6) 4) に同じ 62
- 7) 4) に同じ 72
- 8) 「日本の食生活全集 愛知」編集委員会:『日本の食生活全集23聞き書 愛知の食事』農村漁村文化協会 東京 220(1989)
- 9) 4) に同じ 72
- 10) 4) に同じ 90
- 11) 4) に同じ 129
- 12) 4) に同じ 160-162
- 13) 福田アジオ他編:『日本民俗大辞典』吉川弘文館 東京 713-714(2000)
- 14) 成城大学民俗学研究所編:『日本の食文化—昭和初期・全国食事習俗の記録—』岩崎美術社 東京 368(1990)
- 15) 4) に同じ 172
- 16) 4) に同じ 174
- 17) 4) に同じ 234-240
- 18) 4) に同じ 237
- 19) 4) に同じ 271-272
- 20) 4) に同じ 318
- 21) 4) に同じ 343
- 22) 4) に同じ 63
- 23) 4) に同じ 75
- 24) 4) に同じ 134-135
- 25) 4) に同じ 68
- 26) 4) に同じ 69
- 27) 4) に同じ 72
- 28) 4) に同じ 76
- 29) 2) に同じ 25-32
- 30) 4) に同じ 32
- 31) 4) に同じ 51
- 32) 豊橋市史編集委員会編:『豊橋市史 第二巻』豊橋市 愛知 483(1975)
- 33) 4) に同じ206, 207
- 34) 4) に同じ 221
- 35) 渡辺和敏監修:『近世豊橋の旅人たち—旅日記の世界—』豊橋市二川宿本陣資料館 愛知 175-177, 246, 251(2002)
- 36) 4) に同じ 120
- 37) 杉浦博子『吉田藩日記』にみる食について 愛知学泉大学・短期大学紀要第41号, 125-133(2006)